量子コンピュータで学ぶ 量子プログラミング入門



第四章 構成した回路を観測する

本章の内容

全体目次 (./Contents.ipynb)

- 第四章 構成した回路を観測する
 - 観測の原理
 - 回路の出力を観測する

観測の原理

qubitを観測すると、重ね合わせの状態は失われて、古典bit 0か1が観測される

一般に、n個の基底からなる量子の状態を観測すると、重ね合わせの状態は失われて、その基底の一つが観測される。

qubit $|\psi\rangle=\alpha|0\rangle+\beta|1\rangle$ を観測した時、 $|0\rangle$ (古典bit 0に対応)が観測される確率は $|\alpha|^2$ 、 $|1\rangle$ (古典bit 1に対応)が観測される確率は $|\beta|^2$ に等しい

一般に、先の量子の状態 $|\psi\rangle$ を観測した時、重ね合わせの状態が失われて、基底 $|i\rangle$ が観測される確率は、 $|\alpha_i|^2$ に等しい。 $|\alpha_0|^2+|\alpha_1|^2+|\alpha|_2|^2+\cdots+|\alpha_{n-1}|^2=1$ という条件は、観測によって、いずれかの基底が観測されるという条件と等しい。

コードのインポート

In [1]:

%matplotlib inline

%config InlineBackend.figure_formats = {'png', 'retina'}

import numpy as np

from qiskit **import** QuantumCircuit, ClassicalRegister, QuantumRegister **from** qiskit **import** execute

Import Aer

from qiskit import BasicAer

回路の出力を観測する

量子ゲート H 一つからなる回路の出力を観測する $H|0\rangle$

In [2]:

```
#1 qubitの量子レジスターを生成する
q = QuantumRegister(1, 'q')
# g レジスターに作用する量子回路を生成する
circH = QuantumCircuit(q)
# qubit 0 に H ゲートを追加する。
circH.h(q[0])
#1bitの古典レジスターを生成する
c = ClassicalRegister(1, 'c')
#計測を含む量子回路を生成する
meas = QuantumCircuit(q, c)
meas.barrier(q)
# qubit 0 の計測結果を古典ビットにうつす
meas.measure(q,c)
# Qiskit の回路オブジェクトは、'+' 演算子で回路の合成を
# サポートしている
qc = circH+meas
#回路を描画する
qc.draw(output='mpl')
```

Out[2]:

$$H|0\rangle = \frac{1}{\sqrt{2}} \begin{pmatrix} 1 & 1 \\ 1 & -1 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \end{pmatrix} = \frac{1}{\sqrt{2}} \begin{pmatrix} 1 \\ 1 \end{pmatrix} = \frac{1}{\sqrt{2}} |0\rangle + \frac{1}{\sqrt{2}} |1\rangle$$

In [3]:

```
# Aerのqasm_simulatorを利用する
backend_sim = BasicAer.get_backend('qasm_simulator')

# 回路を qsam_simulator上で走らせる
# 実行の繰り返しの回数を shotsに指定する
# デフォールト値は、1024 である
job_sim = execute(qc, backend_sim, shots=1024)

# jobから結果を取り出す
result_sim = job_sim.result()

counts = result_sim.get_counts(qc)
print(counts)
```

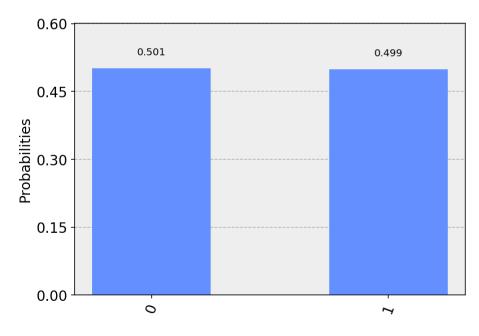
{'1': 511, '0': 513}

先の計算結果から $H|0\rangle=\frac{1}{\sqrt{2}}|0\rangle+\frac{1}{\sqrt{2}}|1\rangle$ である。 これから、 0を観測する確率は、 $(\frac{1}{\sqrt{2}})^2=\frac{1}{2}$ 、 1を観測する確率は、 $(\frac{1}{\sqrt{2}})^2=\frac{1}{2}$ に等しいことがわかる。シミューレーションの結果は、 それを裏付けている。

In [4]:

from qiskit.tools.visualization import plot_histogram
plot_histogram(counts)

Out[4]:



量子ゲート H 一つからなる回路の出力を観測する H|1
angle

In [5]:

```
#1 qubitの量子レジスターを生成する
q = QuantumRegister(1, 'q')
# q レジスターに作用する量子回路を生成する
circH = QuantumCircuit(q)
# qubit 0 に X ゲートを追加する。
circH.x(q[0])
# qubit 0 に H ゲートを追加する。
circH.h(q[0])
#1bitの古典レジスターを生成する
c = ClassicalRegister(1, 'c')
#計測を含む量子回路を生成する
meas = QuantumCircuit(q, c)
meas.barrier(q)
# qubit 0 の計測結果を古典ビットにうつす
meas.measure(q,c)
# Qiskit の回路オブジェクトは、'+' 演算子で回路の合成を
# サポートしている
qc = circH+meas
#回路を描画する
qc.draw(output='mpl')
```

Out[5]:

$$H|1\rangle = \frac{1}{\sqrt{2}} \begin{pmatrix} 1 & 1 \\ 1 & -1 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} 0 \\ 1 \end{pmatrix} = \frac{1}{\sqrt{2}} \begin{pmatrix} 1 \\ -1 \end{pmatrix} = \frac{1}{\sqrt{2}} |0\rangle - \frac{1}{\sqrt{2}} |1\rangle$$

In [1]:

```
# Aerのqasm_simulatorを利用する
backend_sim = BasicAer.get_backend('qasm_simulator')

# 回路を qsam_simulator上で走らせる
# 実行の繰り返しの回数を shotsに指定する
# デフォールト値は、1024 である
job_sim = execute(qc, backend_sim, shots=1024)

# jobから結果を取り出す
result_sim = job_sim.result()

counts = result_sim.get_counts(qc)
print(counts)
```

```
NameError Traceback (most recent call last)
<ipython-input-1-90698d074de6> in <module>
    1 # Aerのqasm_simulatorを利用する
----> 2 backend_sim = BasicAer.get_backend('qasm_simulator')
    3
    4 # 回路を qsam_simulator上で走らせる
    5 # 実行の繰り返しの回数を shotsに指定する
```

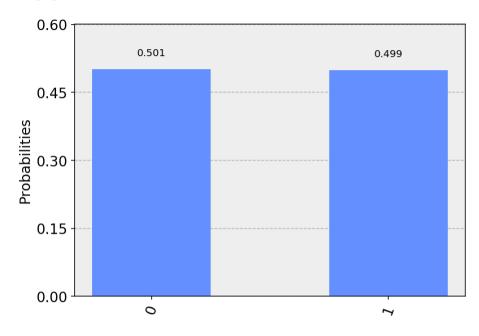
NameError: name 'BasicAer' is not defined

先の計算結果から $H|1\rangle=\frac{1}{\sqrt{2}}|0\rangle-\frac{1}{\sqrt{2}}|1\rangle$ である。 これから、 0を観測する確率は、 $(\frac{1}{\sqrt{2}})^2=\frac{1}{2}$ 、 1を観測する確率は、 $(-\frac{1}{\sqrt{2}})^2=\frac{1}{2}$ に等しいことがわかる。シミューレーションの結果は、 それを裏付けている。

In [7]:

from qiskit.tools.visualization import plot_histogram
plot_histogram(counts)

Out[7]:



このことは、 $H|0\rangle$ と $H|1\rangle$ の出力は、 $|1\rangle$ の成分の符号が反対であるにも関わらず、観測によっては区別がつかないことを意味している。

もっと一般に、状態 $\alpha|0\rangle+\beta|1\rangle$ と状態 $\alpha|0\rangle+e^{i\theta}\beta|1\rangle$ は、 $|e^{i\theta}\beta|^2=|e^{i\theta}|^2|\beta|^2=|\beta|^2$ であるので、観測によっては区別がつかない。

量子ゲート $R_{\nu}(y=\pi/4)$ 一つからなる回路の出力を観測する

 $R_v(\theta)$ は、次の行列で表されるゲートである。

$$R_{y}(\theta) = \begin{pmatrix} \cos(\theta/2) & -\sin(\theta/2) \\ \sin(\theta/2) & \cos(\theta/2). \end{pmatrix}$$

In [8]:

```
#1 qubitの量子レジスターを生成する
q = QuantumRegister(1, 'q')
# q レジスターに作用する量子回路を生成する
circ = QuantumCircuit(q)
# qubit 0 に Ry (y=\pi/4)ゲートを追加する。
circ.ry(np.pi/4, q[0])
#1bitの古典レジスターを生成する
c = ClassicalRegister(1, 'c')
#計測を含む量子回路を生成する
meas = QuantumCircuit(q, c)
meas.barrier(q)
# qubit 0の計測結果を古典ビットにうつす
meas.measure(q,c)
# Qiskit の回路オブジェクトは、'+' 演算子で回路の合成を
# サポートしている
qc = circ+meas
#回路を描画する
qc.draw(output='mpl')
```

Out[8]:

$$q:|0\rangle$$
 R_y
 0.79
 $c_0: 0$

$$R_y(\pi/4)|0\rangle = \begin{pmatrix} \cos(\pi/8) & -\sin(\pi/8) \\ \sin(\pi/8) & \cos(\pi/8). \end{pmatrix} \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} \cos(\pi/8) \\ \sin(\pi/8) \end{pmatrix} = \cos(\pi/8)|0\rangle + \sin(\pi/8)|1\rangle$$
 よって、 0 が観測される確率は $|\cos(\pi/8)|^2 \approx (0.92388)^2 = 0.8536$.

1が観測される確率は $|sin(\pi/8)|^2 \approx (0.38268)^2 = 0.1464$ となる

In [9]:

```
# Aerのqasm_simulatorを利用する
backend_sim = BasicAer.get_backend('qasm_simulator')

# 回路を qsam_simulator上で走らせる
# 実行の繰り返しの回数を shotsに指定する
# デフォールト値は、1024 である
job_sim = execute(qc, backend_sim, shots=1024)

# jobから結果を取り出す
result_sim = job_sim.result()

counts = result_sim.get_counts(qc)
print(counts)
```

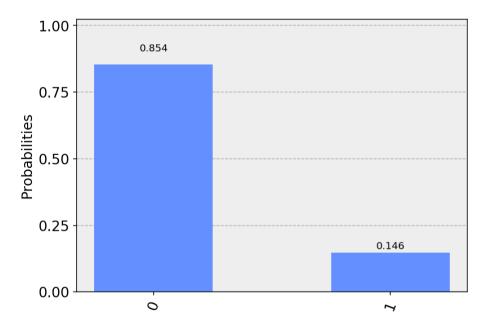
{'1': 150, '0': 874}

この値は、先の計算と、ほぼ一致する。 0 が観測される確率は $|cos(\pi/8)|^2=(0.92388)^2=0.8536$ 、 1 が観測される確率は $|sin(\pi/8)|^2=(0.38268)^2=0.1464$ となる

In [10]:

from qiskit.tools.visualization import plot_histogram
plot_histogram(counts)

Out[10]:



前の章へ (./3_simulation.ipynb) 全体目次 (./Contents.ipynb) 次の章へ (./5_ibm_q.ipynb)

In []: